

西 福 井 遺 跡

—一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査—

平成 29 年 1 月

大阪府教育委員会

西 福 井 遺 跡

—一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

序 文

西福井遺跡は茨木市西福井三丁目及び東福井二丁目に所在する東西370m、南北680mの拡がりをもつ遺跡です。

この遺跡は、昭和58年、大阪府立福井高等学校新設工事に先立つ発掘調査によって、縄文時代から中世の集落跡および古墳時代中期の古墳群であることが分かっています。

今回の調査は、西福井遺跡を南北に縱断する一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査で、平成27年度に実施したものです。

調査の結果、鎌倉時代の柱穴列や耕作溝などが検出され、その下層からは、縄文時代の土器や石器が出土するなどの成果が得られました。

これらは、西福井遺跡における土地利用の歴史に、新たな知見を加える貴重な成果ということができます。

最後になりましたが、調査の実施にあたり、地元関係者ならびに大阪府都市整備部、大阪府茨木土木事務所、茨木市教育委員会の方々には多大なご協力をいただきましたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも府内の文化財保護行政により一層のご理解とご協力をお願いいたします。

平成29年1月

大阪府教育庁文化財保護課長

星住 哲二

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて平成27年度に実施した、一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う、茨木市西福井三丁目及び東福井二丁目所在の西福井遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、文化財保護課調査事業グループ課長補佐 橋本高明の指導の下、同主査 岡田 賢、専門員 西口陽一・辻本 武を担当者として実施した。
3. 遺物整理は、文化財保護課調査管理グループ副主査 薙田道子、同専門員 阪田育功を担当者として実施した。
4. 発掘調査の調査番号は、15015である。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は発掘調査担当者が行い、遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
6. 本書の執筆は岡田・西口・辻本が行った。分担は目次に示すとおりである。
7. 発掘調査の出土遺物や写真・図面等の記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
8. 発掘調査・遺物整理にあたっては、以下の方々より御指導・御教示・御協力いただきました。
森村健一、正岡大実（順不同、敬称略）
9. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。
10. 本書は、300部を作成し、一部あたりの単価は780円である。

凡　　例

1. 調査にあたっては、平面直角座標第VI系を用いた。遺構平面図には、座標値をX Y軸について示した。
2. 標高は、すべてT. P. (東京湾平均海面) 値を使用した。
3. 遺構番号は、検出順に番号を付した。
4. 土層断面の土色については、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帳』2006年を使用した。
5. 本書掲載の遺物は、本文挿図・図版写真とともに共通した通し番号を付している。

本文目次

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査経過と方法

第1節 調査に至る経過（岡田）	1
第2節 調査の方法（辻本）	2
第2章 位置と環境（西口）	3
第3章 調査の成果	
第1節 1区遺構（辻本）	12
第2節 2-a・b区遺構（辻本）	14
第3節 2-c・d区遺構（辻本）	16
第4節 1区・2区遺物（西口）	19
第4章 まとめ（辻本・西口）	23
抄録	

挿図目次

第1図 平成26年度確認調査トレンド配置図	1
第2図 平成27年度調査区と昭和57・58年度調査区（斜線部）	2
第3図 調査区位置図	3
第4図 調査区区割図	3
第5図 周辺跡遺分布図	4
第6図 昭和58年度Ⅲ-2区3号墳・館跡検出状況（右が北）	6
第7図 昭和57・58年度および平成27年度調査区位置図	7・8
第8図 昭和58年度Ⅰ区・Ⅱ区遺構検出状況	9
第9図 昭和58年度Ⅰ区・Ⅲ-1A区・Ⅲ-3区遺構検出状況	10
第10図 昭和58年度Ⅲ-4区出土繩文土器、Ⅰ区SK61出土弥生土器	11
第11図 昭和58年度Ⅰ・Ⅲ区出土石器、5号墳出土須恵器甕	11
第12図 昭和58年度2号墳出土雞冠形埴輪、Ⅱ区館跡出土墨書き土器（佛）	11
第13図 1区断面模式図	12
第14図 1区平面図（第1面・第2面）	13
第15図 2-a・b区断面模式図	14
第16図 2-a・b区平面図（第1面・第2面）	15

第17図	2-a区第1面小ピット列平面・断面図	15
第18図	2-c・d区断面模式図	16
第19図	2-c・d区平面図（第1面～第3面）	17
第20図	2-c区第3面小ピット列平面・断面図	18
第21図	確認調査・1区出土遺物実測図	19
第22図	2区出土遺物実測図	20
第23図	完成した歩道（2区北から）	23

図版目次

図版1	1区・2区遺構
図版2	2区遺構
図版3	1区・2区全景
図版4	確認調査・1区遺物
図版5	1区遺物
図版6	1区遺物
図版7	2区遺物
図版8	2区遺物
図版9	2区遺物
図版10	2区遺物

表目次

第1表	出土遺物観察表	21・22
-----	---------	-------

第1章 調査経過と方法

第1節 調査に至る経過

西福井遺跡は茨木市西福井三丁目から東福井二丁目を中心に、南北680m、東西370mの範囲に広がる、縄文時代から近世まで継続する複合遺跡である。

今回の発掘調査は、一般府道余野茨木線の歩道設置工事に伴うものである。当該工事の施工予定箇所が、西福井遺跡に該当するため、事業者である大阪府茨木市木事務所と大阪府教育委員会（現：大阪府教育庁）は、平成26年度に埋蔵文化財の取扱いについての協議を行い、府立福井高等学校の東に位置する工事予定地（茨木市西福井三丁目および東福井二丁目地内）において事前に遺跡内容の把握を目的とする確認調査を実施することとなった。

確認調査は、南北に走る当該府道の西側に4カ所（No.1～4トレンチ）、東側に2カ所（No.5、6）、計6カ所のトレンチを設定し、平成26年10月に実施した（第1図）。

調査の結果、地表下約1.2mまで掘削したNo.1トレンチでは、古墳時代と中世の2面の遺構面が検出された。地表下約1.1mまで掘削したNo.2トレンチでは、弥生時代と古墳時代・中世の3面の遺構面が検出された。地表下約1.2mまで掘削したNo.3トレンチでは、弥生時代と古墳時代・中世の3面の遺構面が検出された。地表下約1.35mまで掘削したNo.4トレンチでは、古墳時代・中世・中世後期の3面の遺構面が検出された。地表下約1.1mまで掘削したNo.5トレンチでは、古墳時代・中世・中世後期の3面の遺構面が検出された。地表下約1.5mまで掘削したNo.6トレンチでは、古墳時代と中世の2面の遺構面が検出された。以上、すべてのトレンチで、現耕作土下1.1～1.5mまでの間に、複数面の遺構面と遺物包含層の存在が確認され、縄文土器や須恵器・フイゴ羽口・瓦器・土師器などの遺物（図版4-a）が出土した。

この調査結果を受けて再度協議を行い、歩道設置工事の施工範囲の中で、上記の埋蔵文化財が損壊を受ける府道東西の擁壁設置部分について、平成27年度の工事施工前に本発掘調査を行うことになった。なお、この擁壁とは、コンクリート製の重力式擁壁のことで、府道の高さが現地表面より高く、道路面と同じ高さの歩道を設置しようとすると、官民の用地境界に必要なものである。擁壁を設置するため、擁壁の基礎部の幅の分と工事用の余掘りの分を合わせた部分の地下を掘削する工種が発生する訳である。

本発掘調査は、平成27年11月2日に開始し、同年12月28日に完了した。



第1図 平成26年度確認調査トレンチ配置図

第2節 調査の方法

今回の調査区は、府立福井高校と市立福井小学校の間を南北に走る府道の両側に沿った位置にある(第2図)。今回の調査範囲は、歩道設置工事により地下の遺跡に影響を与える範囲に限定されたため、道路擁壁設置部分と擁壁を伴う隣接耕作地への進入路設置部分になった。また、掘削深度も工事掘削深度と同じG.L. -0.9mに限られることになった。これにより、発掘調査区は、府道東側では幅1.5m、長さ38mの細長いトレンチの北端に2.5×3mの拡張区が付随し、西側では幅1.5m、長さ74mの細長いトレンチの中央に2.5×3mの拡張区が付随するものになった(第3図)。また、掘削深度が限定されたことによって、発掘調査による掘削は部分的には地山面にまで達していない。

調査区の形状は細長く、また平面直角座標の北方向に対して約8度西に振るため、調査区の形状に合わせた地区割りを設定した。

調査区は府道を挟んで東西に分かれるので、東側を「1区」、西側を「2区」とした(第3・4図)。

1区は延長38mであり、北から20mの地点で南北に分けて、北側を「北半部」、南側を「南半部」とした。北半部の北端は東側に2.5×3mの調査区が追加されたため、この部分を「1区拡張区」とした。

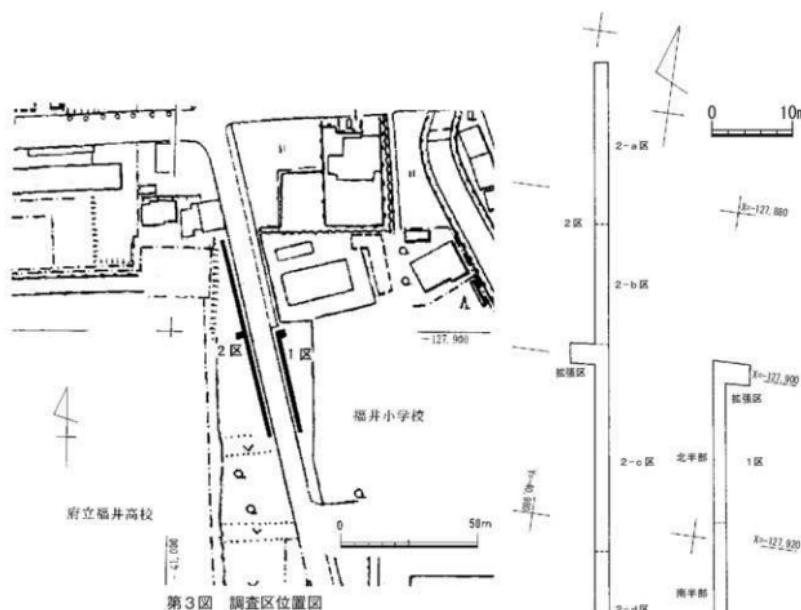
2区は延長74mであるが、2枚の畑に跨って設定した調査区である。2枚の畑は約0.4mの段差で境界をなしている。調査区北端からこの境界までは34mであり、北端から20mの地点までを「2-a区」、20m地点からこの境界までを「2-b区」とした。境界から調査区南端までは40mであり、境界から25m地点までを「2-c区」、25m地点から南端までを「2-d区」と名付けた。また2-c区の北端の西側に2.5×3mの調査区が付け加わり「2-e区拡張区」とした。



第2図 平成27年度調査区と昭和57・58年度調査区（斜線部）

発掘調査は1区から開始し、これの終了後2区に着手した。2区は調査工程の都合によりa・b区とc・d区の南北に分けて二工程で調査を進め、2-e区拡張区はe区と同時に調査した。2区の調査が終了した後、追加された1区拡張区を調査し、これで全ての調査が終了した。

発掘調査は、現代の約0.3m程の厚みのある耕作土と床土を機械で除去した後、複数の遺構面の精査を人力で繰り返しながら、G.L.-0.9mの深さまで実施した。各遺構面では随時写真撮影を行ない、遺構実測は手書きによる平板測量で行なった後に平面直角座標測量を行ない、遺構図に取り付けた。



第3図 調査区位置図

第4図 調査区区割図

第2章 位置と環境

茨木市は、大阪府北部の三島地域に位置し、南北に長い市域を持っている。地形的には、北から北摂山地、山地から派生する丘陵部、大阪平野の一部をなす三島平野が広がっている。また、北摂山地を源とし、市域を南北に流れる安威川、佐保川、茨木川などによって形成された段丘地形がみられる。

西福井遺跡（第5図1）は茨木市のほぼ中央部、地形が丘陵部から平野部にかわる地点に所在し、佐保川右岸の沖積地から低位段丘にかけて立地する。東西約370m、南北約680mの拡がりをもつ遺跡で、昭和57年に大阪府立福井高等学校新設に先立つ試掘調査によって発見された。調査の結果、縄文時代から中世の集落跡及び古墳時代中期の古墳群が発見されている。

この西福井遺跡周辺には、多くの遺跡や古墳が発見されている（第5図）。

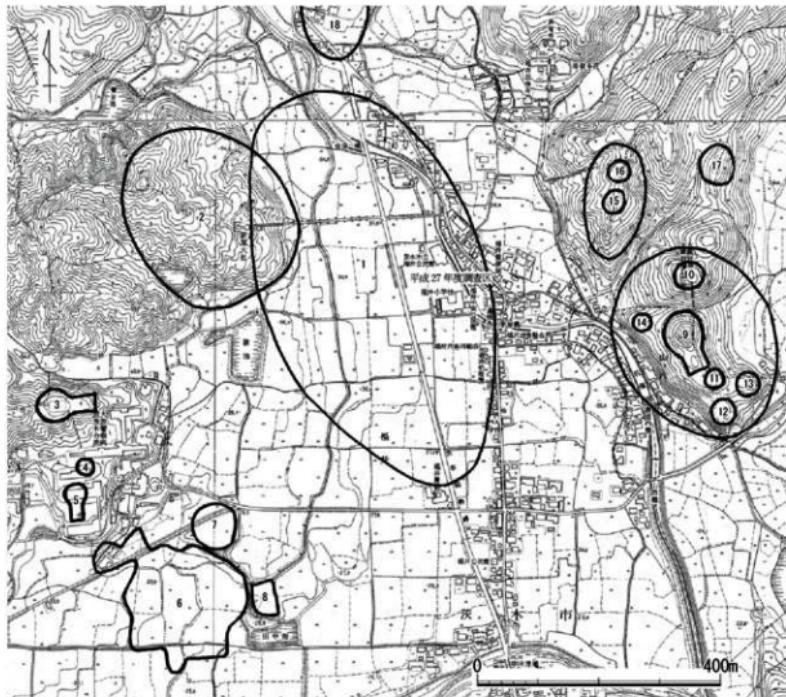
西福井遺跡北西部の宮山には、全壙した古墳もあるが、30基以上の古墳が確認された古墳時代後期の

新屋古墳群（2）があり、式内社の新屋坐天照御魂神社が鎮座している。

西福井遺跡の西側には、標高65mの丘陵上に府指定史跡である古墳時代前期の紫金山古墳（3）がある。紫金山古墳は、全長約110mの前方後円墳で、主体部である竪穴式石室から三角縁神獣鏡を含む12面の銅鏡や碧玉製腕飾などの副葬品が検出されている。副葬品の中には、直弧文の描かれたゴホウラ製貝輪や径36cmもある勾玉文鏡など珍しいものも多いが、中でも鉄製品の多いのが特徴である。短甲・刀などの武具、馬鎌・鎌などの農具、鋸・斧などの工具、鉛などの漁具まで納められていた。

紫金山古墳の南側には、横穴式石室から画文帶神獣鏡や乳文鏡・玉類・農工具・馬具・須恵器などの副葬品が出土した古墳時代後期の円墳である青松塚古墳（4）がある。

青松塚古墳の南側には、古墳時代後期の墳丘長50mほどの前方後円墳である南塚古墳（5）がある。



1. 西福井遺跡 2. 新屋古墳群 3. 紫金山古墳 4. 青松塚古墳 5. 南塚古墳 6. 横井遺跡 7. 海北塚北方遺跡 8. 海北塚古墳 9. 將軍山古墳
10. 將軍塚古墳 11. 將軍山古墳群3号墳 12. 將軍山古墳群5号墳 13. 將軍山古墳群5号墳 14. 將軍山古墳群7号墳 15. 真庭寺第1号古墳 16. 真
庭寺第2号古墳 17. 將軍山第1地主遺跡 18. 横井城跡

第5図 周辺遺跡分布図

主体部である横穴式石室から時期や形式の異なる凝灰岩製の組合式石棺が2基検出され、棺外から三組の馬具と共に一千本にも達する大量の鉄鎌・鉄矛・挂甲・衝角付冑などの副葬品が出土した。

紫金山古墳や南塚古墳のある丘陵の南東部の傾斜地には、弥生時代後期にはじまり、古墳時代後期以降の集落跡でもある福井遺跡（6）や海北塚北方遺跡（7）がある。

福井遺跡の東には、古墳時代後期の府指定史跡である海北塚古墳（8）がある。この古墳は、段丘の端に築かれた古墳で、大型の横穴式石室内に緑泥片岩製の組合式石棺が検出され、棺外から金銅製龍文環頭柄頭や馬具・須恵器などの副葬品が多數出土している。

西福井遺跡の東側の丘陵上には、宅地開発で消滅してしまい、石室だけが移築されている古墳時代前期の前方後円墳である将軍山古墳（9）がある。将軍山古墳は、標高64mの丘陵上にある全長107mの前方後円墳で、主体部である竪穴式石室から硬玉製勾玉やガラス小玉・銅鏡・鉄鎌・鉄劍・鉄刀・鉄釣針・短甲などの副葬品が検出されている。

将軍山古墳の近辺には、藤原鎌足墓と伝えられている古墳時代後期の將軍塚古墳（10）や主体部が横穴式石室の將軍山3号（11）・4号（12）・5号（13）・7号墳（14）などがある。

將軍塚古墳の北方に、谷を隔てて古墳時代後期の真龍寺1号墳（15）・2号墳（16）があり、同じ丘陵上には、弥生時代後期の壺棺などの検出された將軍山第1地点遺跡（17）がある。

西福井遺跡の北側には、建武元年（1334）楠木正成が西国街道や丹波街道の要衝を守るために築き、のちに守護細川氏の據城となったと伝える福井城（18）があった。

このように、この西福井遺跡周辺には、幾つもの重要な遺跡や古墳が密集して発見されており、その中心位置に西福井遺跡が存在していると指摘できる。

なお、昭和57・58年度の西福井遺跡の調査結果についても、今回、概略を紹介しておく。

昭和57年、茨木市西福井三丁目に府立高校が新設されることになった。その場所の地目は水田で、地形は西側が高く（標高約37m）、東側が低い（標高約30m）傾斜地であった。南北200m、東西160mの工事範囲は、既存水路および盛土で地下の構造が残される範囲を除き、すべて事前に発掘調査された。

発掘調査は、工事の進捗状況に伴って計画されたため、南側の道路新設部分（0区）、市道部分（1区）から始まり、校舎棟や体育館・プールのII区・III区およびグラウンド擁壁部分（III-4区）など細かく分かれ（第6図）、昭和58年2月から11月までの調査期間で、調査面積は約24,000m²に及んだ。

0区では、古墳時代後期の溝やピットが検出され、須恵器などが出土した。

I区では、弥生時代前期の溝や土坑（第9図b）が検出され、緑色片岩製の大型石包丁やサヌカイト製の石鎌・蛤刃石斧などの石器（第11図左）と共に前期末の弥生土器（第10図右）が大量に出土した。また、埴部は削平されていたが、古墳時代中期の円墳1基（第8図a）・方墳3基も検出され、堀から埴輪や須恵器が出土した。飛鳥・奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物・溝・井戸なども検出され（第8図c）、須恵器・土師器・「衆」や「大十」と書かれた墨書き土器などが出土した。平安・鎌倉時代の掘立柱建物・溝も検出され、灰釉や瓦器などが出土した。

II区では、弥生時代後期から古墳時代前期の土坑や溝が検出され、弥生土器や土師器が出土した。また、埴部が削平された古墳時代中期の円墳4基（第8図b）・方墳1基・前方後円墳（？）1基が検出され、円筒埴輪・朝顔形埴輪・雞鶏形埴輪（第12図左）・須恵器（第11図右）・鉄斧などが出土した。

古墳時代後期～奈良・平安時代のビットや溝・井戸・土坑なども検出され、須恵器・土師器・灰釉などが出土した。鎌倉時代では、1区画だけで450坪を超える面積をもった館跡が検出され（第9図a）、館の周囲を取り囲む大溝から「佛」と墨書きされた中世土器（第12図右）などが多く出土した。

Ⅲ区では、弥生時代前期の土器や弥生時代後期・古墳時代前期の土器が出土した。古墳時代中期の方墳も1基検出された。また、奈良時代の土師器長胴甕を2つ合した土器棺が検出され（第9図c）、乳幼児棺と推定された。また、Ⅲ-4区北端およびⅢ-1a区北東隅の地山直上の黒褐色粘土層中からは、縄文時代中期の土器片（第10図左）が多数出土し、集落跡の存在が分かった。

以上を改めて、時代順に整理すると、縄文時代中期に初めて人が住んだ。その後、弥生時代前期の時期まで、歴史が途絶える。弥生時代前期に人が住んだが、中期の土器は出土せず、集落の途絶えたことが分かる。弥生時代後期になって、土器が再び出土することによって、集落の復活が分かる。古墳時代前期も土器が出土し、集落の存続していたことが分かる。それが、古墳時代中期には、大小11基の古墳からなる古墳群と変化する。古墳時代後期以降奈良時代・平安時代は、溝や竪穴住居・掘立柱建物などが検出され、土器も多数出土することによって、集落跡であったことが分かる。鎌倉時代には、館跡（第6図）を中心に、掘立柱建物が多数検出され、大集落であったことが分かる。南北朝～室町時代以降の遺物や遺構は少なく、水田に変化していた様子である。江戸時代には、調査区西端で瓦やフイゴ・鉄滓が出土し、鍛冶工房の跡が検出された。その後は、現代に至るまで、水田であった。



第6図 昭和58年度Ⅲ-2区3号墳・館跡検出状況（右が北）



a. 小型円墳（I区9号墳）



b. 積穴住居と小型円墳
(II区SX2・2号墳)



c. 古代掘立柱建物と小ビッ
ト群（I区）

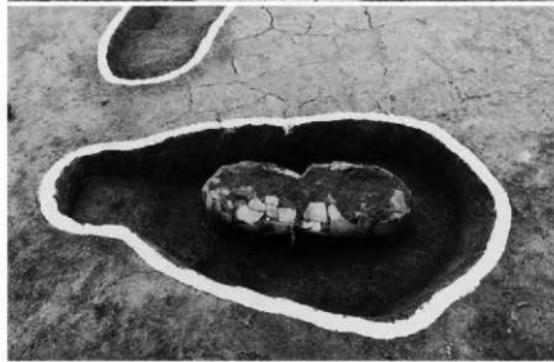
第8図 昭和58年度I区・II区遺構検出状況



a. 中世の直角に曲がる溝
(III-1 A区館跡)



b. 新石器時代前期土器窯
(I区SK50)



c. 奈良時代土器棺
(III-3区SK50009)

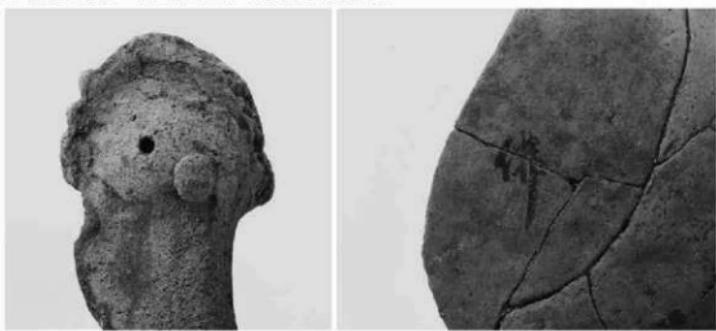
第9図 昭和58年度 I区・III-1 A区・III-3区遺構検出状況



第10図 昭和58年度Ⅲ-4区出土縄文土器、Ⅰ区SK61出土弥生土器



第11図 昭和58年度Ⅰ・Ⅲ区出土石器、5号墳出土須恵器壺



第12図 昭和58年度2号墳出土雌雞形埴輪、Ⅱ区館跡出土墨書き土器（佛）

第3章 調査の成果

第1節 1区遺構

基本層序

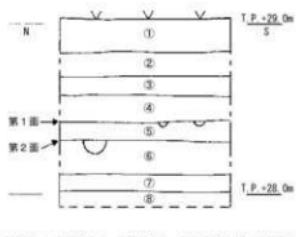
1区は調査着手直前まで農作物が耕作されていた畠地であった。この近年の耕作に関係する土層である①②③層を機械により掘削し、④層以下を遺構・遺物の確認を行ないながら人力掘削した。

④層はにぶい黄橙色土、⑤層は灰黄褐色砂質土、⑥層はにぶい黄橙色粘質土、⑦層は褐灰色粘土となり、その下は⑧灰白色砂である（第13図）。

④～⑦層はほぼ水平堆積であり、それぞれの層から中世の瓦器片や土師器片等が出土するが、磨滅した細片が大部分である。この④～⑦層は中世の耕作土層と考えられ、その時期は13世紀以降になると判断される。⑤層の上面および⑥層の上面で、耕作に伴うと思われる溝群を検出した。それぞれを「第1面」「第2面」として写真撮影と遺構実測を行なった（第14図）。

最下層の⑧層は近在を流れる佐保川に由来する砂層であろう。今回はこの層を10cmほど下げたレベルで調査予定深度のG.L.-0.9mとなって調査を終えた。今回の調査では⑧層からの遺物の出土がなく、

その年代は不明と言わざるを得ない。



第13図 1区断面模式図

辺に現在も痕跡を残す条里地割と同じであるので、条里施行が中世に遡ることが確実となった。

小ピット群： 調査区南半部で6個の小ピットを検出した。上記の鋤溝群と重なるが、時期は鋤溝群より新しい。径0.2m、深さ0.1mを測り、埋土はにぶい黄褐色砂質土～黄褐色砂質土。小ピット群は建物等としてまとまらず、ランダムに散らばった位置にある。耕作に伴う杭跡等の遺構になるのかも知れない。

溝-002： 調査区北半部で、上述の鋤溝群の北に接する位置にある。不定形土坑と考えて検出したが、後に4本の溝が平行しているものと判明した。検出した範囲が狭いので正確な方向は分からぬが、鋤溝群と直行する東西方向の溝と見ても差し支えないであろう。埋土は黄灰色土。

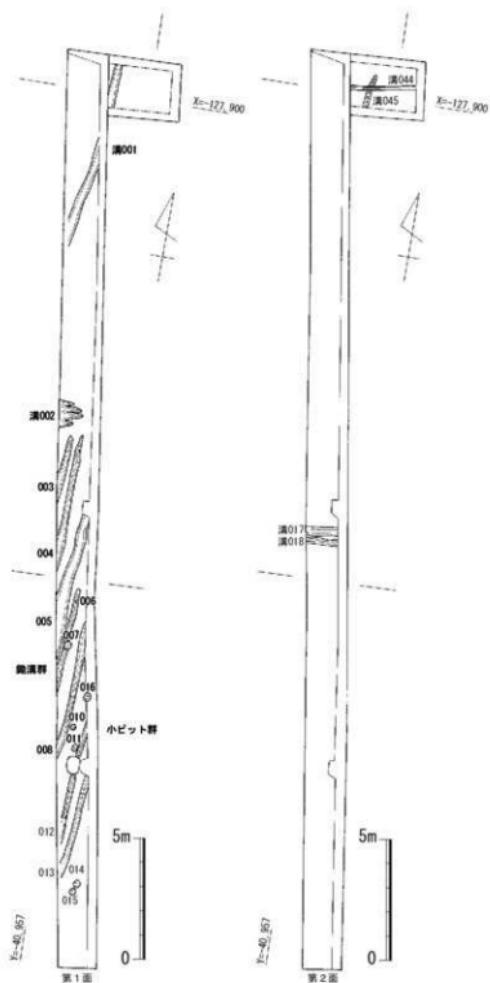
(第2面)

溝-017・018：北半部と南半部の接する位置で検出した二本の平行する溝である。幅0.3m、深さ0.05～0.1mで、埋土はにぶい黄橙色土。方向は平面直角座標の東西方向から7°程度ずれており、上述の鉢溝群の方向とは違いを見せてている。

溝-044：拡張区で検出した東西方向の溝。幅0.1m、深さ0.05mで、埋土はにぶい黄橙色土。方向は

溝-017・018とほぼ同一方向であり、これらの溝が時期的に同じである可能性を考えることができる。

溝-045：拡張区で検出した南北方向の溝。溝-044とは切られる関係にある。幅0.1m、深さ0.05mで、埋土はにぶい黄橙色土。方向は溝-001とほぼ同じであるが、検出面のレベル等から時期の違うものと判断される。



第14図 1区平面図（第1面・第2面）

第2節 2-a・b区遺構

基本層序

この調査区は2-a区のうちの北半部分が隣接の府立福井高校のグラウンド盛土裾にかかり、それ以外は調査着手直前まで農作物が耕作されていた畠地であった。以上のような近年の盛土層①や耕作関係土層②～⑤を機械で掘削した後、⑥層以下を遺構・遺物の確認を行ないながら人力掘削した。

⑥層は褐灰色シルト、⑦層は褐灰色砂土、⑧層は明黄褐色粘質土、⑨層は黄灰色シルト、⑩層はにぶい黄色砂質シルト、⑪層は黒色粘質土となる（第15図）。

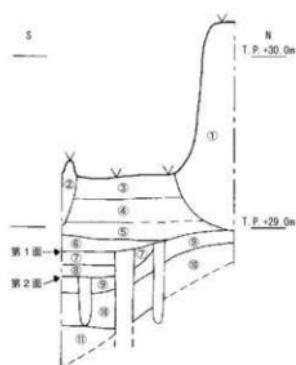
南半部のb区では⑥～⑩層はほぼ水平堆積するが、北半部のa区では⑥～⑧層は消え去って⑨～⑩層が0.2mほど高いレベルに堆積する。最下層の⑪層は調査区全域に所在する土層であるが、G.L.-0.9mの予定掘削深度のためa区では⑪層まで検出しなかった。

⑥～⑧層からは中世の瓦器や土師器・須恵器の細片が出土した。なお⑧層からは中世とともに奈良時代の磨滅していない須恵器环が出土しており、周辺にこの時代の遺構の存在が予想される。⑨～⑩層からは遺物がほとんど出土せず、時期は不明である。近在を流れる佐保川に由来する砂質土層の可能性がある。⑪層は以上とは全く違う黒色の土層で、部分掘りをしてみたところ、この土層が数十cm以上に部厚く堆積していることを確認した。この調査区ではこの層から遺物は出土しなかった。

⑦層の上面および⑨層の上面で遺構を検出し、それぞれ「第1面」「第2面」と名付けて写真撮影と遺構実測を行なった（第16図）。

検出した遺構

（第1面）



①高校跡埋土 ②現代耕野廃土 ③現耕土 ④現代耕土
⑤現代土 ⑥10YR6/1褐色シルト ⑦210YR6/1褐色砂土
⑧10YR7/6明黄褐色粘質土 ⑨2.5Y6/1黄灰色シルト
⑩2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト ⑪10YR2/1黒色粘質土

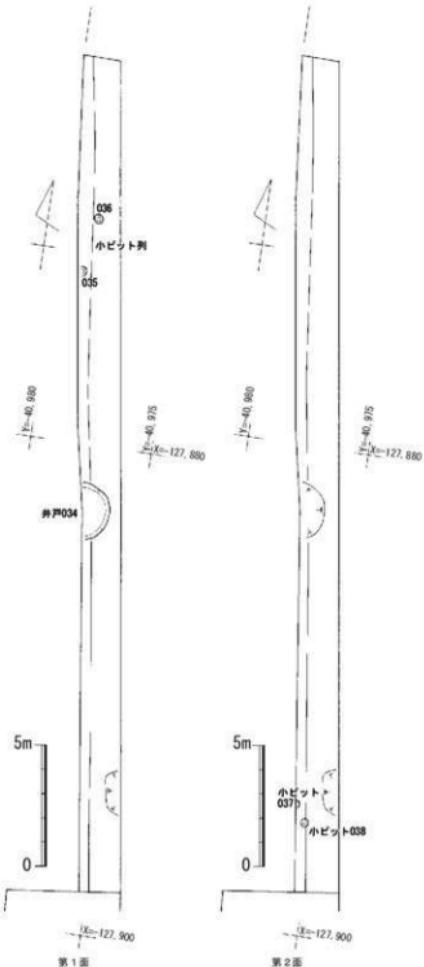
第15図 2-a・b区断面模式図

小ピット列（ピット-035・036）：a区の中央や北寄りの位置にピット-035・036の二つの小ピットを検出した。ピット-035は調査区の壁にかかり、断面で観察された。大きさは径0.4m、深さ0.5mで、埋土は黄灰色シルトに黒色粘土ブロックが混じる。中に15cm大の石が入っており、柱の礎石であった可能性がある。ピット-036は035より北へ2.2m離れた位置にあり、径0.3m、深さ0.3mを測る。中に0.2m大のやや平らな石が二枚重なるように据えられていた。これも柱の礎石であった可能性がある。埋土は035と同様に黄灰色シルトであるが、二枚の石の下のピット底部分には灰色砂が溜まる。この二つの小ピットは中に入っている石の上面のレベルがT.P.+28.7mと同じであることから一連の遺構であることは確実で、ピット列は平面直角座標の北から7°東に振る方向にある。これは掘立柱建物跡の一部と考えることができるが、柱間寸法が2.2mを測り、中世の建物としてはちょっと異例となるので、

今のところ可能性があるものとしておきたい（第17図）。

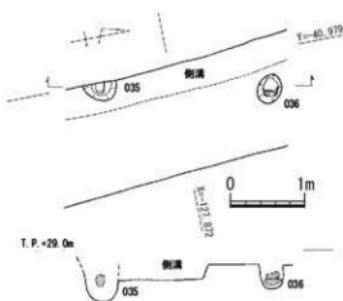
井戸-034：a区とb区の境界付近に井戸-034を検出した。径2.3mで、西半部は調査区外となる。予定掘削深度の関係で、深さは0.4mまでの確認で止めた。埋土は黄灰色砂土で、人頭大の礫や黒色粘土ブロックが混じる。遺物は中世の瓦器、土師器などが出土した。

(第2面)



第16図 2-a・b区平面図（第1面・第2面）

ピット-037・038：b区の南端部の西側壁際で二つの小ピットを検出した。二つのピットの間隔は0.7mで、ともに径0.15m、深さ0.2m、埋土は黄灰色シルトに黒色粘土ブロックが混じる。二つのピットは互いに関係があるのか、単独のものが偶然に近接した位置にあるのか、不明と言わざるを得ない。

第17図 2-a区第1面小ピット列
平面・断面図

第3節 2-c・d区遺構

基本層序

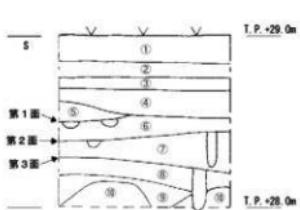
この調査区は第2節のa・b区から約0.4mの段差で下がるレベルにある。a～d区は調査着手直前までは農作物を耕作していた畠地であったので、この段差は現代の畠の境界に相当するものである。現代の耕作関係土層である①～③層を機械で掘削した後、④層以下を遺構・遺物の確認を行ないながら人力掘削した（第18図）。

④層は褐灰色シルト、⑤層はにぶい黄橙色粘質シルト、⑥層は褐灰色砂土、⑦層は明黄褐色粘質土、⑧層は黄灰色シルト、⑨層はにぶい黄色砂質シルト、⑩層は黒色粘質土である。④～⑧層からは主に中世の遺物が出土し、なかに奈良時代の須恵器や縄文時代の石斧片が混じる。

⑤層はd区だけに堆積していた層で、c区にまで広がらない。④⑤層を除去した面、⑥層を除去した面で鈎溝等の遺構を検出し、また⑦層を除去した面でピット列遺構を検出した。それぞれの遺構面を「第1面」「第2面」「第3面」として、写真撮影と遺構実測を行なった（第19図）。

⑧⑨層は近在を流れる佐保川に由来する砂質土層の可能性が高い。1区の⑧層、2-a・b区の⑨⑩層に相当するものと思われる。c区北端の⑧層より縄文土器が出土している。

⑩層は調査区周辺に広く分布する黒色の土層で、c区拡張部ではこの層からサヌカイト片と縄文土器の細片が出土した。2-a・b区の⑪層に相当する。



検出した遺構

(第1面)

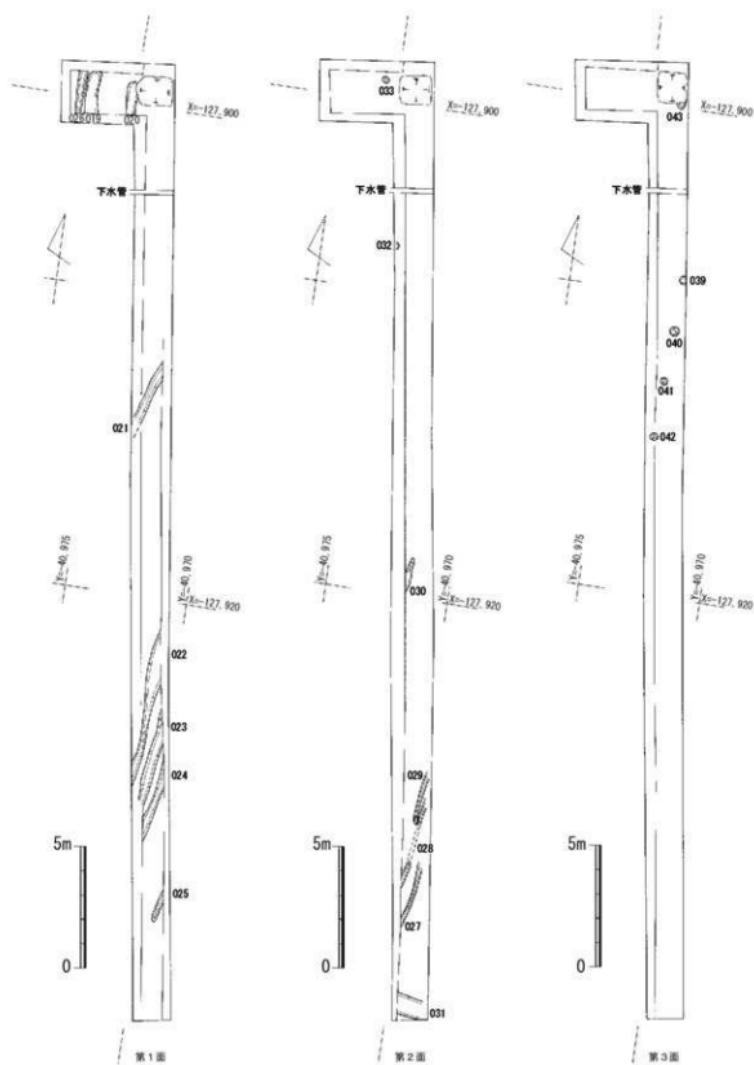
鋤溝群 (022～025) : d区で凡そ平行する4条の溝群を検出し、耕作に伴う鋤溝と判断した。幅0.15～0.5m、深さ0.05mで、埋土は灰黄褐色シルトである。方向は平面直角座標の北から東へ8°振る。1区で検出した鋤溝群と方向に若干の違いがあるので別個の耕作地と思われる。

溝-021 : c区にあって、上述の鋤溝群より8mほど北に離れて走る溝である。幅0.3m、深さ0.1mで、埋土はにぶい黄橙色シルトである。方向は平面直角座標の北から東へ15°振る。何らかの耕作に伴う溝と思われる。

溝群-019・020・026 : c区拡張部で3本の溝を平行して検出した。019と020は約1m離れ、019と020はほぼ接している。方向はほぼ平面直角座標の南北の方向である。溝の幅は0.3～0.5m、深さ0.1～0.15mで、埋土は019が黄灰色シルト、020がにぶい黄橙色シルト、026が褐灰色シルトである。019と020はc区拡張部の平面上で溝の北端が現われ、026は同拡張部の北側断面に溝の延長が出てこなかったので、この溝群はc区の北側外部にまで延びないものと確認された。畑作の畝の溝部に当たる可能性を考えることが出来る。

(第2面)

鋤溝群 (027～029) : d区で一部湾曲しながらも平行状態にある3本の溝群を検出し、耕作に伴う鋤



第19図 2-c・d区平面図 (第1面～第3面)

溝と判断した。幅0.15m、深さ0.05mで、埋土は褐灰色砂土である。方向は概ね平面直角座標の南北方向である。1区第1面の鋤溝群と方向が似るが、関連あるかどうかはにわかに決め難い。

溝-030：c・d区間の境界線近くで検出した溝で、幅0.15m、深さ0.15mで、埋土は褐灰色砂土である。方向は概ね平面直角座標の南北方向である。上述の鋤溝群より7m離れているが、埋土や方向がほぼ同一であることから一連の鋤溝群の可能性がある。

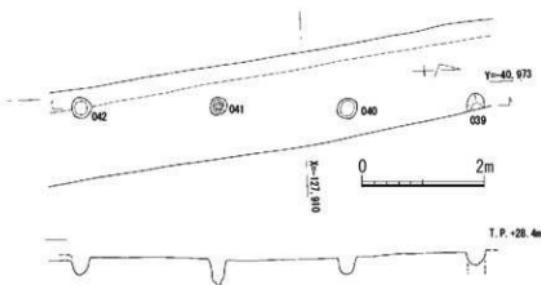
溝-031：d区南端で検出した東西溝で、幅が0.8mと広いが、深さは0.05mと浅い。埋土は灰黄褐色シルト。方向は検出した範囲で測ると、平面直角座標東より南へ10°振る。当時の畠の区画を区切る溝を考えることができる。

小ピット-032・033：032はc区中央の西側壁に観察された小ピット。径0.2m、深さ0.3m、埋土は黄灰色シルト。033はc区拡張部にあって、032より6.5m離れた位置にある。径0.2m、深さ0.15m、埋土は黄灰色シルト。この二つの小ピットはその位置からお互い関係がなく、それぞれ単独で存在するものと思われる。

(第3面)

小ピット列(039～042)：c区で四つ的小ピットが一列に2.2mの等間隔に並ぶ遺構を検出した。小ピットの大きさは径0.25～0.3m、深さ0.4mであるが、039は一部が調査区外となったために0.2mまでの深さしか確認できなかった。本来は他と同様に0.4mほどであろう。041には柱痕が観察された。埋土は黄灰色シルトで、黒色粘土ブロックが混じる。この小ピット列の方向は平面直角座標北より東へ2°振っている。小ピット列は掘立柱建物跡の可能性があるが、柱間寸法が2.2mと中世の建物にしては異例のものとなるので、今のところ掘立柱建物との判断は差し控えたい(第20図)。

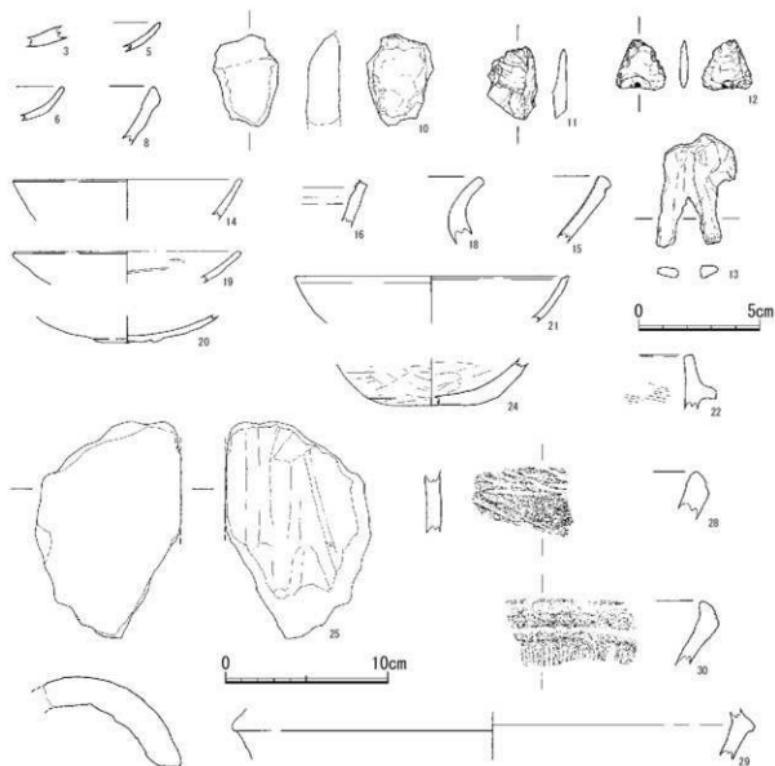
小ピット-043：c区の北端部の擾乱土坑に切られる小ピットを検出した。径0.3m、深さ0.1mで、拳大の石が2個入っていた。埋土は黄灰色シルトで、黒色粘土ブロックが混じる。今のところ、この小ピットは単独で存在すると言わざるを得ない。



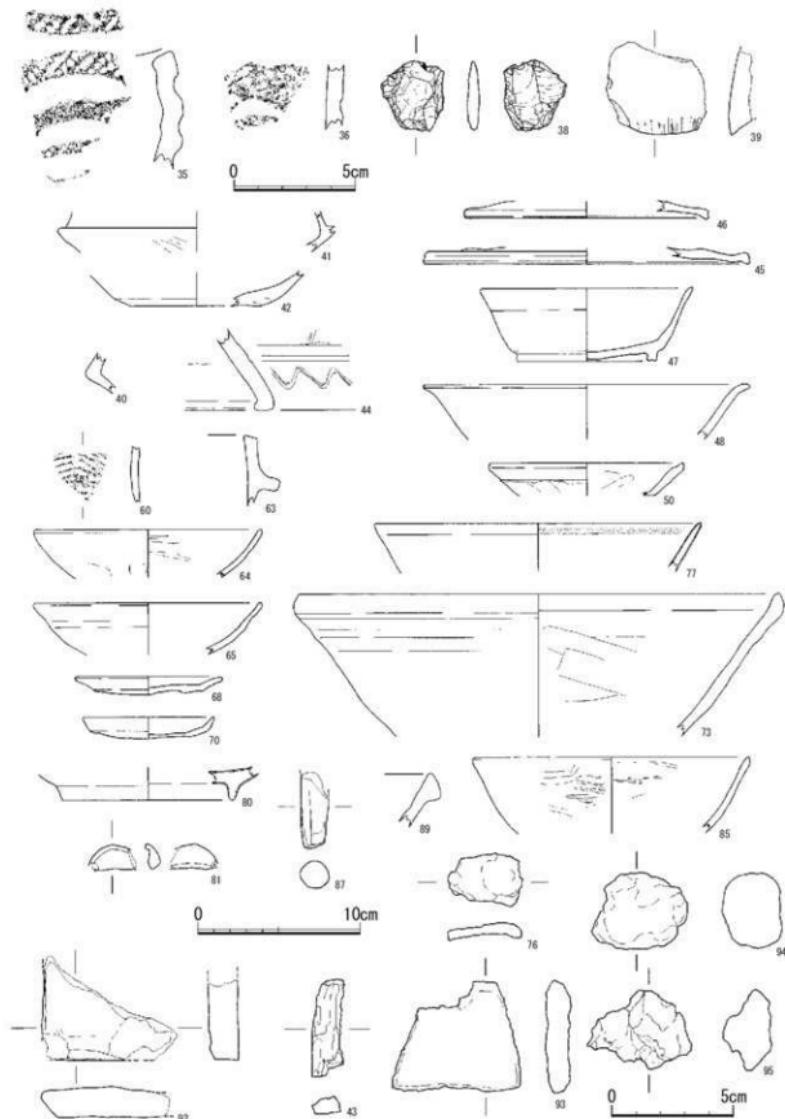
第20図 2-c区第3面小ピット列平面・断面図

第4節 1区・2区遺物

今回の発掘調査では、28リットル入りのコンテナで5箱の遺物が出土した。狭い調査区であったが、遺物量は多いと指摘できる。遺物の大半は、中世土器が占めるが、古い遺物としては、縄文時代中期の北白川C式の土器があり、石器は、楔形・石斧・石鎌未製品があった。石斧は、刃部の断面形が片刃で、外湾することから多頭石斧と推定された。縄文土器の中には、角閃石や金雲母を多数含有した生駒西麓の土器もあった。弥生時代・古墳時代の土器も出土したが、奈良時代の須恵器は保存状態が良好なもので、近くに集落跡の存在が推定された。平安時代の灰釉や鎌倉時代の青磁や丹波焼、瓦なども出土した。鎌倉時代の瓦器や土器に混じって、鉄滓や鉄片、フイゴの羽口・トリベなどが出土し、鍛冶工房の存在が推定された。個々の遺物の法量等は、観察表を参照されたい（第21・22図・第1表）。



第21図 確認調査・1区出土遺物実測図



第22図 2区出土遺物実測図

番号	種類	器種	法量				色調	時代	出土遺構・層位	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)				
1	縄文土器	深鉢	2.4	3.5	0.7	5.6	灰褐色	縄文中期	確認2トレス7層	
2	"	"	1.9	4.3	0.8	6.7	茶褐色	"	"	
3	須恵器	壺身	3.2	3.0	0.9	7.5	灰色	古墳後期	確認3トレス6層	ヘラ記号
4	フイゴ	羽口	2.0	1.7	1.1	3.0	赤褐色	鏡倉	確認4トレス6層	
5	瓦器	楠	2.8	4.2	0.4	4.1	暗灰色	"	"	
6	土師器	小皿	3.4	3.2	0.5	6.3	褐色	"	確認5トレス4層	
7	"	不明	2.6	4.4	0.6	5.5	"	不明	確認6トレス5層	
8	須恵器	こね鉢	4.0	4.0	1.0	15.1	灰色	鏡倉	"	東播
9	フイゴ	羽口	3.8	2.9	2.8	25.2	灰褐色	"	1区2層	
10	土師器	トリベ	3.7	2.6	1.4	8.1	灰橙色	"	1区4層	鉄の付着物
11	石器	楔形	2.8	2.5	0.5	3.7	暗灰色	縄文中期	1区側溝	サヌカイト
12	"	石礫未製品	2.0	2.0	0.3	1.4	"	"	1区3層	"
13	鐵器	不明	4.5	4.0	1.1	11.3	茶色	不明	1区1層	
14	須恵器	壺	2.9	4.0	0.5	6.5	暗灰色	棄良	1区4層	
15	灰釉	洗(盤)	5.1	5.5	0.9	25.9	灰白色	平安	1区表探	瀬戸窯
16	須恵器	壺	3.2	4.4	0.7	11.1	灰色	棄良	1区4層	自然釉
17	"	妻	5.2	5.8	0.7	37.7	"	古墳?	1区側溝	窓壁片付着
18	"	"	4.2	5.3	1.3	31.7	"	"	1区3層	
19	瓦器	楠	3.5	4.6	0.4	6.0	黒灰色	鏡倉	1区4層	
20	"	"	9.3	5.2	0.4	11.9	灰褐色	"	"	
21	"	"	3.5	4.7	0.4	6.3	黒灰色	"	1区3層	橢葉型
22	"	羽釜	3.5	4.7	1.8	17.2	"	"	1区側溝	
23	土師器	灯明皿	2.7	3.5	0.4	4.5	灰橙色	"	1区2層	灯心の煤残存
24	須恵器	こね鉢	6.8	6.1	1.0	38.9	暗灰色	"	1区3層	東播
25	瓦	丸瓦	13.2	9.3	1.7	277.7	暗黒色	"	1区拡張区3層	
26	須恵器	妻	4.4	6.5	1.0	39.5	暗灰色	古墳?	1区床土中	
27	"	壺	3.5	8.0	1.3	38.5	灰色	鏡倉	1区耕土中	叩き目
28	瓦質土器	すり鉢	2.9	5.7	1.3	27.0	黒色	南北朝	1区床土中	
29	陶器	"	3.2	4.9	1.5	23.5	赤褐色	室町	1区2層	備前焼
30	"	"	4.5	8.4	1.2	61.0	茶褐色	江戸	"	丹波焼
31	染付	碗	4.7	5.7	0.5	13.8	灰色	"	1区床土中	波佐見窯
32	縄文土器	深鉢	2.6	3.3	0.7	4.5	灰褐色	縄文中期	2区拡張区7層	
33	"	"	1.8	3.0	0.9	5.2	"	"	"	
34	"	"	3.2	4.3	0.7	9.1	褐灰色	"	2区6層	
35	"	"	5.1	4.5	1.0	26.5	茶褐色	"	"	金雲母含有
36	"	"	3.0	3.5	0.7	7.6	褐灰色	"	"	
37	"	"	4.7	5.6	0.8	25.2	暗茶褐色	"	"	角閃石・金雲母含有
38	石器	楔形	2.2	2.5	0.5	4.0	暗灰色	"	2区拡張区7層	サヌカイト
39	"	石斧	3.9	4.0	0.9	18.4	"	"	2区5層	鞍山岩。多頭石斧?
40	須恵器	壺	3.0	3.6	0.9	7.4	"	古墳?	"	
41	"	壺身	2.8	5.5	0.9	9.6	"	古墳後期	"	
42	"	"	5.0	5.5	0.9	19.5	"	"	2区側溝	
43	石器?	石棒?	4.1	1.3	0.5	4.1	茶色	不明	2区1・2層	
44	須恵器	器台	5.7	7.3	1.2	50.6	灰色	古墳後期	"	
45	"	壺蓋	5.2	7.4	0.6	21.6	"	棄良	2区5層	
46	"	"	3.4	2.8	0.7	6.3	"	"	2区耕土・床土	
47	"	壺	4.5	10.7	0.5	86.0	"	"	2区5層	
48	灰釉	碗	4.5	5.5	0.5	13.0	綠灰色	平安	2区1層	瀬戸窯

第1表 出土遺物観察表(1)

番号	種類	器種	法量				色調	時代	出土遺構・層位	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)				
49	灰釉	洗(盤)	2.7	3.7	0.6	6.1	緑灰色	平安	2区側溝	瀬戸窯
50	土師器	小皿	3.2	5.7	0.4	9.8	灰黄色	鎌倉	2区ピット036	
51	"	"	5.0	6.7	0.3	12.4	灰褐色	"	2区ピット038	
52	鉄滓		3.5	3.4	1.0	9.6	暗茶褐色	"	"	
53	瓦器	椀	3.8	4.2	0.5	9.6	黒色	"	2区ピット040	
54	土師器	小皿	5.5	5.2	0.3	8.7	灰黄色	"	2区井戸034	焼成後穿孔
55	"	"	2.4	4.1	0.4	4.4	"	"	"	
56	"	"	2.8	5.5	0.3	5.4	"	"	"	
57	"	"	3.3	4.8	0.4	7.1	灰茶色	"	"	
58	"	鍋	3.7	4.3	1.0	14.5	灰褐色	"	"	
59	"	"	3.2	5.0	0.8	11.4	暗灰褐色	"	"	叩き目
60	"	"	3.5	3.6	0.4	5.6	茶色	"	2区5層	"
61	"	甕	4.3	4.3	0.8	12.3	灰褐色	奈良	"	
62	"	椀	4.4	3.3	0.6	8.3	暗灰色	平安?	"	
63	瓦器	羽釜	4.4	5.0	0.6	22.8	黒色	鎌倉	"	
64	"	椀	4.0	5.4	0.2	8.4	"	"	2区側溝	
65	"	"	4.7	5.4	0.4	10.7	"	"	"	
66	"	"	5.8	5.5	0.5	14.2	暗灰色	"	"	
67	土師器	小皿	4.0	7.3	0.3	14.4	灰黄色	"	"	
68	"	"	6.4	5.1	0.3	11.9	"	"	"	
69	"	"	3.3	5.3	0.4	8.9	灰褐色	"	"	
70	"	"	1.0	7.8	0.3	23.0	灰褐色	"	"	
71	"	"	5.9	7.4	0.3	18.4	"	"	"	
72	"	"	4.3	6.4	0.3	12.1	"	"	"	
73	須恵器	こね鉢	10.5	7.4	0.9	70.6	暗灰色	"	"	東播
74	"	"	3.4	6.5	0.9	20.4	"	"	"	"
75	陶器	壺	6.5	12.0	1.0	76.1	茶褐色	"	"	丹波焼
76	鉄器	不明	2.1	3.0	0.6	2.4	暗褐色	"	"	
77	青磁	碗	3.5	2.5	0.5	7.4	灰綠色	"	"	龍泉窯
78	弥生土器	甕	2.5	4.7	0.6	7.8	灰黄色	弥生後期	"	叩き目
79	瓦器	小皿	3.8	3.9	0.5	6.5	暗灰色	鎌倉	2区3層	
80	青磁	皿	3.1	6.1	0.9	29.1	暗灰綠色	室町	"	龍泉窯
81	土製品	不明	1.5	2.7	0.6	2.0	灰黄色	不明	"	
82	鉄滓		1.6	2.1	1.3	3.6	暗茶褐色	鎌倉?	"	
83	"		2.4	2.7	1.7	7.4	"	"	"	
84	縹文土器	深鉢	3.6	4.5	0.8	13.8	"	縹文中期	2区1面精査時	
85	瓦器	椀	5.4	6.0	0.4	14.6	黒色	鎌倉	"	
86	"	三足鍋	3.3	1.8	1.5	11.5	灰色	"	2区側溝	
87	"	"	4.5	1.5	1.7	12.4	暗灰色	"	2区1・2層	
88	土師器	羽釜	4.9	5.3	0.6	19.8	灰黄色	"	2区側溝	
89	須恵器	こね鉢	3.8	6.1	1.2	28.6	暗灰色	"	2区1・2層	
90	瓦質土器	すり鉢	4.0	5.4	0.8	27.3	"	室町	2区1面精査時	
91	瓦	平瓦	4.1	5.0	1.2	25.7	灰黄色	鎌倉	2区1・2層	須恵質
92	"	"	6.5	8.1	1.9	88.1	暗灰色	"	2区側溝	
93	鉄器	不明	4.5	5.2	0.9	27.4	茶色	"	"	
94	鉄滓		3.0	3.3	2.3	46.6	"	"	"	
95	"		3.2	3.8	1.8	22.0	"	"	2区1・2層	
96	"		2.4	3.7	1.2	11.5	"	"	"	

第1表 出土遺物観察表(2)

第4章　まとめ

今回の発掘調査は、小規模な限定的なものであったが、種々の新知見を得ることができた。以下、時代順にまとめる。

①繩文時代　2区拡張区付近の地表下約60cmの黒色粘質土およびその上層の砂質シルト層から繩文土器や石器が出土した。土器は、いずれも繩文時代中期の深鉢で、内1例(37)は生駒西麓産であった。石器は、二上山サスカイト製楔形石器で、楔形石器は1区でも出土した。繩文土器・石器は、昭和57・58年度発掘調査区でも出土していて、その出土位置が当時の調査区の北東隅に固まることから、今回の出土位置を含めて、すぐ近辺に繩文時代の集落跡の存在することが分った。

②奈良時代　2区北半部の地表下約50cmの黄灰色シルト層などから、奈良時代の須恵器杯などが出土した。土器の保存状態が良く、ローリングを受けていないことから、すぐ近辺に集落跡の存在することが分った。

③平安時代～鎌倉時代　1区・2区で、耕作土層および3面の遺構面が検出された。耕作土層は、遺物を含む数枚の灰黄褐色～にぶい黄橙色土層がほぼ水平に堆積しているもので、これは長年にわたって耕作地を維持するために、何回も耕作土を積み上げてきた結果と思われた。遺構面は、面により方向などが異なるが、鰐溝・ピット・ピット列・井戸などが検出された。2区南半部では、ピット4個が等間隔に一列に並び、掘立柱建物か柵列と考えられた。2区北半部では、根石の入ったピットや井戸が検出され、瓦器や青磁碗・東播須恵器こね鉢・丹波焼壺などが出土した。また、2-b区のピット038からは、鎌倉時代の土師器小皿に伴って鉄滓が出土し、1区ではフイゴ羽口やトリベ・鉄滓・鉄片などが出土したことから、中世の鍛冶工房の存在が分った。



第23図 完成した歩道（2区。北から）

報 告 書 抄 錄

大阪府埋蔵文化財調査報告2016-2

西福井遺跡

—一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目

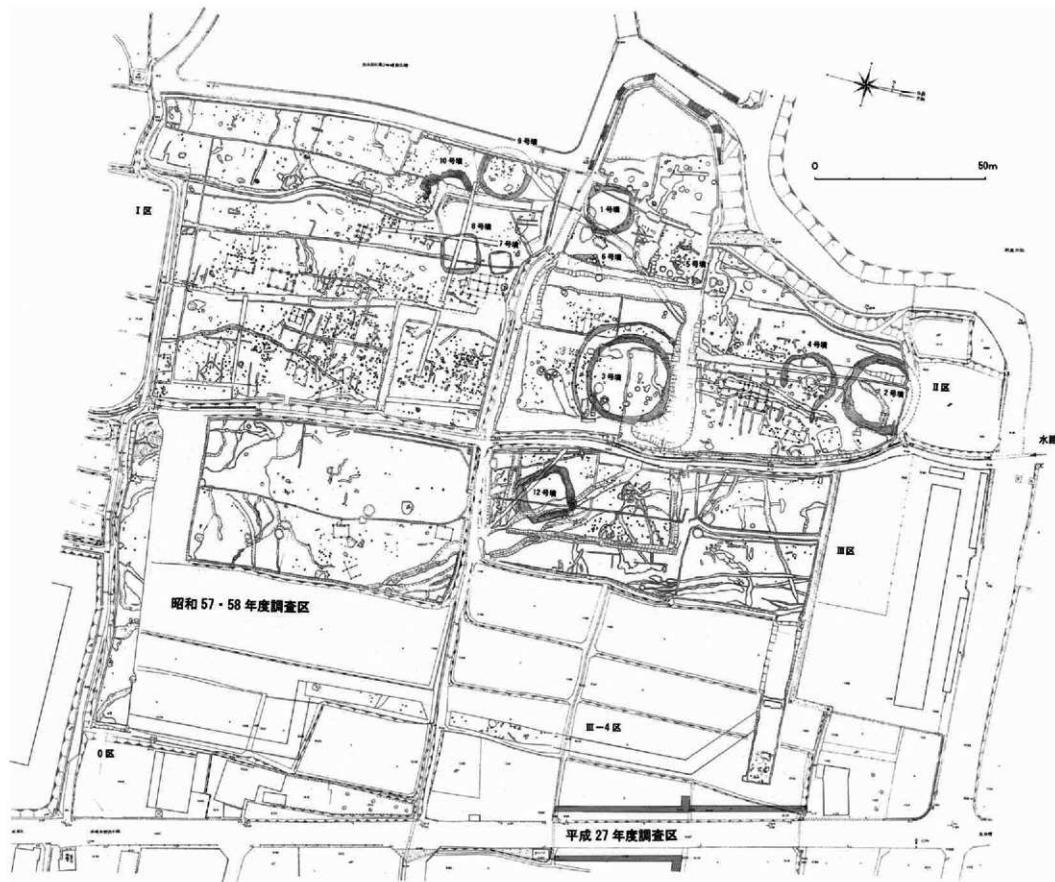
TEL 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成29年1月31日

印刷 株式会社 近畿印刷センター

〒582-0001 柏原市本郷五丁目6番25号

TEL 072-972-5918



第7図 昭和57・58年度および平成27年度調査区位置図

図 版



昭和58年度Ⅲ区北東部全景（南東から）（右下が平成27年度2-a・b区）

図版1
1区・2区遺構



a. 1区第1面鉢溝群（南から）



b. 1区第2面溝群（南から）



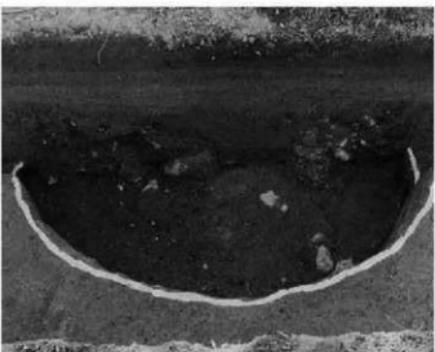
c. 1区拡張区第2面溝（東から）



d. 2-a区第1面小ピット列（北から）

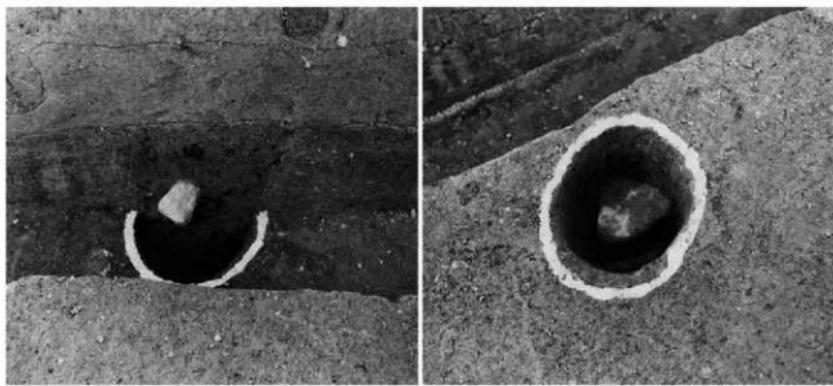


e. 2-b区第2面小ピット（南から）



f. 2-b区第1面井戸034（東から）

図版
2
2区遺構



a. 2-a区第1面ピット035 (東から)

b. 2-a区第1面ピット036 (南東から)



c. 2-c・d区第1面鉢溝 (南から)

d. 2区拡張区第1面溝 (東から)



e. 2-d区第2面鉢溝 (北から)

f. 2-c区第3面小ピット列 (南から)



a. 1区調査終了面全景（南から）



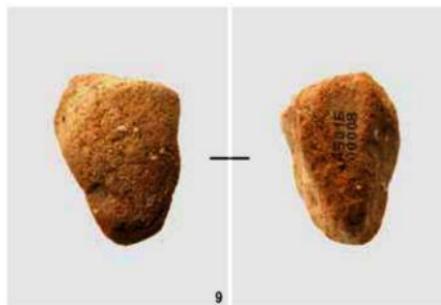
b. 2-a・b区調査終了面全景（南から）

図版 4

確認調査・1区遺物



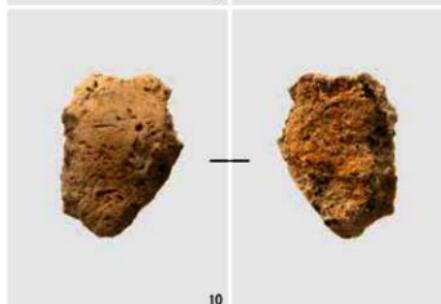
a.確認調査 繩文土器（1・2）、須恵器（3・8）、フイゴ羽口（4）、瓦器（5）、土師器（6・7）



9



c. 1区 模形石器（11）、石鏃未製品（12）



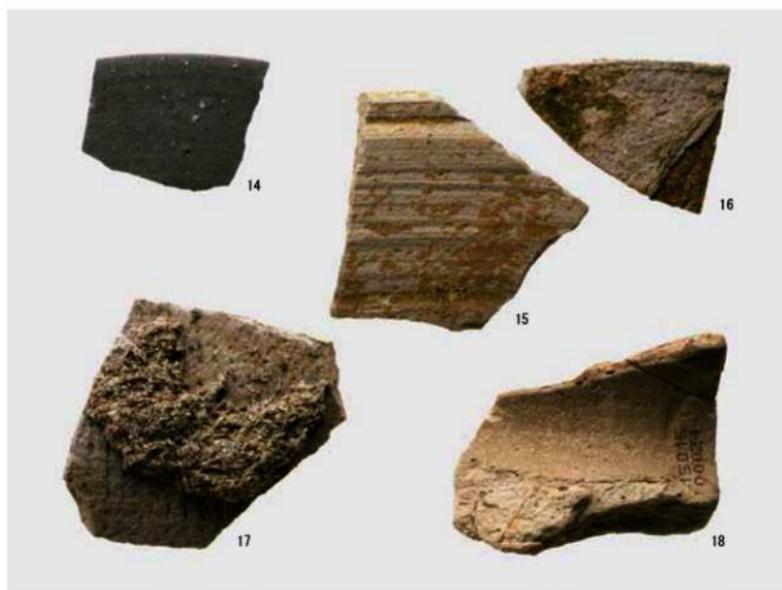
10

b. 1区2層 フイゴ羽口（9）、4層 トリベ（10）

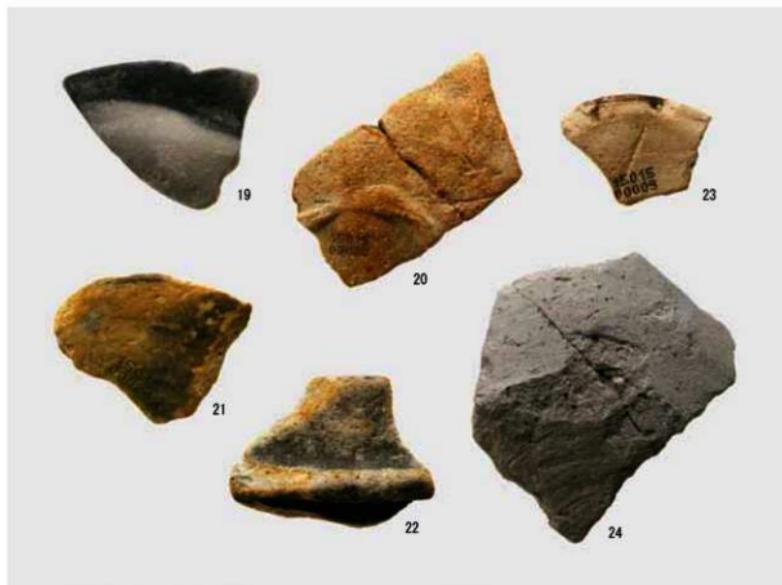


13

d. 1区1層 鉄片（13）



a. 4層 須恵器 (14・16)、3層 須恵器 (17・18)、表採 灰釉 (15)

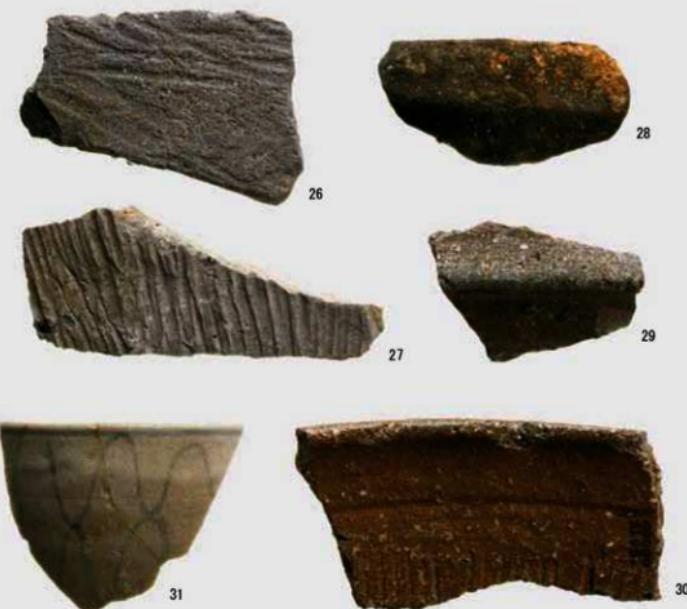


b. 4層 瓦器 (19・20)、3層 瓦器 (21・22)、須恵器 (24)、2層 土師器 (23)

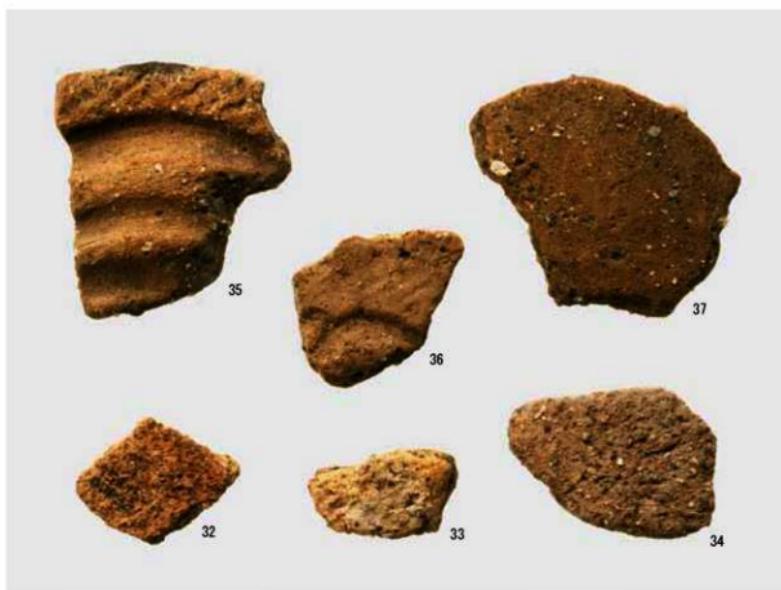
図版
6
1区遺物



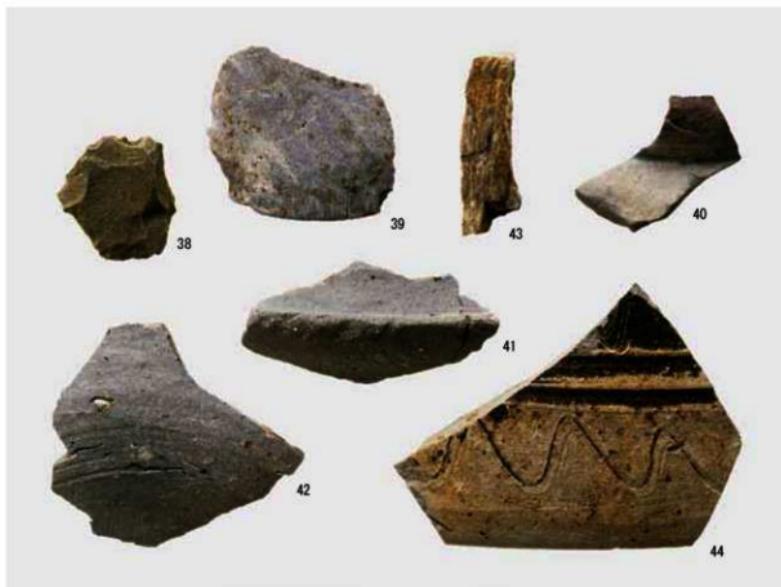
a.拡張区 3層 丸瓦 (25)



b.床土中 須恵器 (26・27)、瓦質土器 (28)、波佐見焼 (31)、2層 備前焼 (29)、丹波焼 (30)



a.拡張区 7層 繩文土器 (32・33)、6層 繩文土器 (34~37)



b.拡張区 7層 楔形石器 (38)、5層 磨製石斧 (39)、須恵器 (40~42)、
1・2層 須恵器 (44)、結晶片岩片 (43)



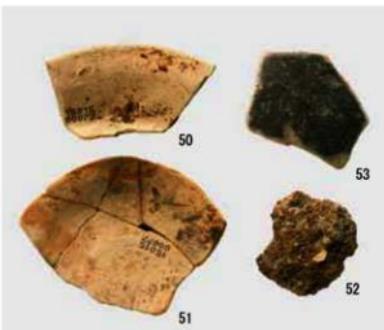
a. 5層 須恵器 (45)、耕土・床土 須恵器 (46)



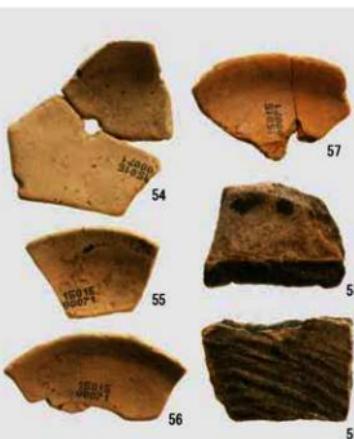
b. 5層 須恵器 (47)



c. 1層 灰釉 (48・49)



d. ピット 土師器 (50・51)、瓦器 (53)、鉄滓 (52)



e. 井戸034 土師器 (54~59)



f. 5層 土師器 (60~62)、瓦器 (63)



a. 5層 瓦器（64～66）、土師器小皿（67～72）



b. 5層 須恵器（73・74）、丹波焼（75）、青磁（77）、鉄片（76）

圖版 10
2区遺物



a. 3層 弥生土器 (78)、瓦器 (79)、青磁 (80)、土製品 (81)、鉄滓 (82・83)



b. 1・2層 繩文土器 (84)、瓦器 (85～87)、土師器 (88)、須恵器 (89)、瓦質土器 (90)



c. 1・2層 平瓦 (91・92)、鉄片 (93)、鉄滓 (94～96)